

日中科学技術

No.32

1983.4.20

発行所

日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島3-1-6

小宮ビル2F 電話 03(836)4830

第17回常任理事会についての報告

3月5日、神田学士会館で第17回常任理事会が開かれた。

出席者は次のとおりであった。

(会長) 有山兼孝, (常任理事) 越智勇一, 鹿取一男, 田村三郎, 野上茂吉郎, 橋口隆吉, 和達清夫, (事務局長) 肥後孝, ほかに委任状提出9名。

I 会長報告

1. 中国科学院との連絡

(1) 和達清夫会員は、中国科学院の招待により、日本環境協会会長および本協会役員として訪中されるが(会報No.31), この件についての中国科学院との連絡の状況が報告された。

(2) 1月下旬、中国科学院から次の辞典類が本協会に寄贈された。

日中数学用語集1冊, 日本外来語辞典1冊, 工学関係辞典, 計9冊(蒸気ガスタービン2冊, 日英漢建築用語3分冊, 鉄道1冊, 石油精製1冊, 鋳造1冊, 冶金1冊)。

(3) 1983年版「日本」の刊行に関して、1月以来、組版作業、文章改訂への中国科学院の積極的協力の事情が報告された。

(4) 1982年版中国経済年鑑の科学技術関係の論説2篇については翻訳を残り近く会員に頒布の予定である(会報No.30)。

2. 科学技術者の交流案件

(1) 御子柴宣夫東北大学教授の北京大学での集中講義の件(会報No.31)と東北学院畢克

禎院長ほか4名の訪日の件(会報No.31)について報告された。

(2) 北京工業大学講師劉星氏の理化学研究所への留学滞在期間の延長について同大校長あて連絡中のところ、このほど承諾の電報が到達した。

3. 事務局職員の移動

大庭紀子(住所変更による通勤の都合によって退職)

道口直子(4月1日より採用)

II 審議事項

1. 昭和58年度収支予算

鹿取常任理事から、昭和57年度収支の状況について、1月末現在での決算見込が報告され事務費の節約、事業費の伸張、交流事業費の中での補助事業の実施状況等が説明された。

また、58年度収支予算推計については、前年度実績を基準とした事情を説明、57年度決算の確定をまってさらに所要の修正を行うことが承認された。支払予算上、本協会援助事業を可能な限り活発化することが望ましい等の意見交換があった。

2. 協会規約のうち財政条項等の改訂

協会運営の健全化のため、現行規約のうち、財政関係条項(入会金の徴収、基本財産の設定とその管理その他)を改訂する方向で検討することになった。検討委員会を設け、次回総会をめぐりに作業を行う方針が決定された。

3. 協会補助交流事業の追加

(1)訪日留学生に対する研究費補助制度の新設
中国からの公費留学生(旅費・滞在費全額
中国側負担)について、会員である担当教
官の申請があれば、月額2万円1年間を限
度として、留学生受入れに伴う研究費補助
ができる道を拓く。ただし、受入れ大学等
の自助努力を前提に、審査委員会の審査を
経て補助額を決定する。

(2) 中国科学技術者を集中講義・特別講義に
招待する場合の滞在費の援助
特定の専門領域での中国の優れた研究者を
招いて日本の大学等で集中講義・特別講義
を行う場合に、会員からの申請を条件とし
て、期間3週間以内、金額20万円を限度と
して滞在費補助ができるようにする。ただ
し、招待主大学等の自助努力の範囲を超え
る場合に限る。

4. 昭和58年度の協会運営

(1) 通常総会の開催

日時：昭和58年7月9日(出)、午前10:30～
12:00

場所：神田学生会館第302号室

議題：(i)昭和57年度事業報告、同収支決算

(ii)昭和58年度事業計画、同収支予算(iii)役

員改選(iv)協会規約改正(v)その他

理事会 同日上午10.00～10.30

講演会 同上、同日午後1.00～5.00頃

第16回常任理事会での決定(会報No.30)

にもとづいて、会員から講演希望申込み
を受け付けて講演を依頼する。

(2) 協会事業のあり方

(i) 会員との連帯の強化

会報、会告、配布資料のほか、会員受益
または会員の協会利用促進など、諸制度の
PRと活用による会員との結びつきの強化
をさらに具体的に検討する。

(ii) 小講演会の開催

前回常任理事会の決定(会報No.30)にも
とづき、その実現の具体案を検討する。

(iii) 会告について

従来、会報にのせていたが、一括して会
報別紙にまとめ、会員への周知をはかる。

(3) 協会財政基盤の強化

58年度予算上も会費収入増を見込んでおり
交流事業活発化のためにも財政基盤の強化
が不可欠である。今後具体案件に即して適
切な配慮をする必要のあることが確認され
た。

日中交流ニュース

1. 東北工学院訪日団との懇談

昭和58年3月22日、神田如水会館

出席者

訪日団：畢克楨院長、梁寧元教授、恩琉田助
教授、冶金部外事司 張広義工程師

協会側：(会長) 有山兼孝、(会長代理) 橋口隆
吉、(事務局長) 肥後孝

東大工学部：天辰正義助手

有山会長の訪日団歓迎挨拶のあと、畢団長から
協会招待による来日実現について謝辞があり、相
互に専門の紹介などがあって懇談に移る。

1. 畢院長、梁教授の母校旅順工大時代の恩師の

思い出、最近の消息など、有山、橋口両氏の記憶
に残る先生方の氏名、専門など、語り合ううちに
双方とも初対面とは思われない友好交流の雰囲気
が生み出されていた。

2. 東北学院は、中国の大学約800のうち、80
の重点大学の一つで、冶金部所属の3重点大学(北
京鋼鐵学院、中南鉄冶学院、瀋陽東北学院)のう
ち、最古最大の最も充実した大学である。ここは、
工学系10、理数系2、教養1の学部(系)をもち、
教官数1550名、文革の破壊10年の影響から立ち
直っていないが、教授60余名、副教授約300、講
師約800、助手約400名の陣容となってきた。在

籍学生7600余人、卒業生は29000近くになる。

日本の東北大学とは協力協定を結んでおり、今回もまずここを訪問した。日米欧諸国との間では、年60人以上の招待教授受入れ、送り出し50名以上である(対日本:東北大,東工大,東大,名大,九大,阪大,京大,北大など短期集中講義受入,研修生,留学生多数派遣)

3. 協会業務の概要紹介のあと、とくに人的交流について、同大学としても、協会会員を通じて、今後の交流に役立つことがありうるとの感想を述べられた。また、一方では、日本では、旅順工大卒の先輩が相当の分野で活躍しておられ、両教授は、友好交流の強化に期待を抱き、東工大卒の恩氏は、同級生の教授との再会の喜びと併せて、団員一同将来の実り多い交流のために今回の訪日が大変喜んでおられる様子は、招待に当たった本協会としても喜ばしいことであった。

〔後藤先生のお話し〕

同団の招待について、一昨年から協会の支援を含め全計画の推進に当たってこられた東京工大後藤和弘教授は、同団帰国ののち、協会を訪れて、御報告を頂いた。本会懇談とは別にその概要を以下に述べる。

1. 東北学院訪日団招待に当たって、有山会長が招待者となって頂いたことは、今回訪日を実現するのに大変効果的であったことを先ず感謝したい。

訪日団訪問先への公式依頼状、団の成田到着時の事務局長の出迎え、協会公式訪問と会長、会長代理との懇談等適切有益であった。

2. 主要大学、工場等の公式訪問について

(1) 東北大学:東北工学院との協力協定をもつ大学であり、学長、理学部長、工学部長、その他附属研究所長それぞれが、熱意をこめて応待され、大きな学術交流上の成果を得たと聞いている。

(2) 東大とその他大学関係:東大の工学部長、その他も学長や工学部長が応待されて学術交流上高度の意見交換ができ、適切な視察等を配分され、有益であった。

(3) 企業の研究所、工場訪問:純粋な学術交流団

体である貴協会が招待団体であることと、会長の正式依頼の書面など、受入れ側としても、全てを順調に取り進めるのに有益であったと思われる。何れも、専務取締役、工場長など然るべき責任者が接待に当られ、中国国旗を飾って歓迎されたことなど、各方面で行届いた配慮をして頂いた。これらのことは、交流上も両国友好の面からも喜ばしい。

3. 旅順工大卒業の畢院長、梁教授が含まれていたため、その同窓会が3月23日東京で30名を集め、30日には大阪で、両先生の恩師2名をお招きして開かれたことが団員の感銘を一層深めた。

また恩琉田先生は東工大卒業の同期生が同大学で4名も教授をしておられ、30余年ぶりの再会を喜ばれた。今後の交流に役立つことが期待される。(協会は、日中科学者の交流、友好増進上、このような同窓関係などについても適切な連絡、配慮も必要かと思われるとの助言があった。)

4. 東北工学院派遣の在日研究者、留学生の協力
同大学から、現在数十名の研究者、留学生が日本に来ている。これらの人々が、訪日団、とくに院長のお世話に本当に一生懸命に当たって頂いたことは、院長の人柄も惚ばれ、ひとしお感動的であった。

2. 中国科学技術協会との懇談

昭和58年3月28日 日中科学技術交流協会
出席者

中国科学技術協会国際部:金若立(日本担当)
秦経建(通訳)

本協会:肥後孝事務局長

懇談の内容

1. 中科協の交流方針

(1) 国内での指導方針

党の第12回大会で設定された目標(今世紀末までに工・農の生産を倍増し、総生産を4倍にする)を達成することに努力を集中する。このためには、先進的なもののみを追うことをしない、教科書的知識や研究専心的なものも歓迎しない。

教学方面でも、科学技術者育成を兼ね、考え方

及び視野を広めることでより進んだ勉強に役立つよう学生・受講者を鍛え上げるようにする方針をとる。

具体的には、実験室も定期的に開放し、知識訓練班も、学生と研究者、研究者と生産現場の結合を図る立場で諸種の科学事業の推進を図るようということである。

戦局的な重点をエネルギー、工業技術等に置いて上述の目標達成を図るために、科学技術者は重大な責任を負っており、努力すれば夫々の目標達成は可能である。

各級科協は、目標達成へ向けて、多くの賞を発明、創造などの面でも設定することを求められている。

(2) 日中科学技術交流協会との間に定期的な交流をするものを決めて実行して行きたい。例えば、大・小それぞれに決められたもので何件という了解をしたい。

2. 本交流協会の近況についての説明

(1) 会告事項(58.3.5付)で、既に連絡ずみの1.2.5項を簡単に指摘し、その他のものの趣旨、概要を説明。

問、本年度実施予定項目は中科協関係にどのようなものがあるか。

答、現在ない。会員申請方式なので、将来お願いするものが提出されれば、申請書と専門業績その他具体化の参考資料について照会する予定である。

(2) 針灸医学交流

① 先般の訪中団派遣の際、中国側は極めて熱心に接待して頂いたことにお礼を述べ、近日中にその報告書の印刷が完成するが、その中には、中西医学結合について中国側の取組み方の長所指摘箇所も多いと伝えた。中国側から関係の向に配布するため50部寄贈要望を受け了承した。

② 訪中団派遣は隔年実施の要望がある。その間の年に中国側専門家2~3名を招待してはどうかとの話もあるが、本年度の計画には入ってはいないとのことである。中科協は連絡業務を行う立場であり、帰国してから専門学会の意見を徴して返

事する由である。

(3) 懸案事項について

① 中英日農学及び生物学の詞典編纂

昨年6月来日された干船(北京農大獣医系教授)先生は、農業科学院の科学技術情報研究所の先生方と相談して返事をするとの話であったと聞いているが、その後何ら連絡がない(帰国後何らかの返事を出す。)

② 科学映画、昨年9月文部省特選映画のリストを送ったが、何の連絡もない。希望のものは全く出ないか?(希望の前に値段が高いとの話が出て止まっている)何か適当な候補があれば、値段のことは個々の製作社に聞いて見たり、また中国側の要望の状況によっては、何らかの支援措置(例えば、日本のどこかの財団などに相談して見るとか)を考える糸口もつかめるかも知れない。個別的にどれが欲しいというような希望があるならば連絡されてはどうか。(帰国後改めて相談して連絡する)

3. 中科協よりの専門家派遣要望等

(1) ガンの治療に関して、漢法(中医)と西洋医学との結合に関して研究している専門家(若い人でないこと)を推薦して欲しい(中西医学結合研究会の申出)。(訪中時期、ガンの種類は問わない、滞在期間は10日以上2週間で、滞在費は中国側で負担する)

(2) 「海産物の食品加工」(専門家派遣)。海藻類としての昆布その他海産物として海胆の例を示し、日本ではこれらの食品としての加工利用が多方面にわたるので、中国も国内需要のため指導を受けたいとの要望あり。

本件、指導要望箇所、目的、指導内容を明らかにしないと専門家を選び得ない難点ありと説明し、持帰って具体的な返事をする事になった。

(3) 水質処理についての専門家派遣要請

本件も具体的な要望をさらに詰めて欲しいと説明。

(4) 石炭の合理的な利用と節約(専門家派遣)これも具体的な指導希望を示すよう要望。

(5) 「港の石油汚染対策」(専門家派遣)

大連港のタンカーによる港の汚染問題を例に、

事前の発生防止面と汚染後の対策等について指導要望があった。

本件も、汚染源、汚染状況、事後対策等限られた人員では対処困難と思われるので、一般的要望ではなく指導場所、指導目的、指導内容等具体的に示す必要を連絡してある。

(6) 中国の水利学会から訪日団(3~4名)の要望
水源汚染の観測と管理について考察団を訪日させる計画(訪日費用・滞在費全額中国側負担)

具体的な訪問希望先等を協会あてあてで知らせるが、この協会が身元引受団体になって頂けるか、貴協会の依頼であれば内容に応じ対処したいと回答。

以上の派遣要望の各項については関係方面に照会を行ってはいるが、何れも、各テーマを具体的に詰めて行くと1人の専門家では対応できないと思われるので、指導者派遣までにはさらに質問する問題があると考えられること、並びに当協会会員から見ると余りにも現場的なもので対処しにくいということもありうると思われる点も中国側に伝えてある。

3. 中国科学技術交流センター 訪日団との懇談

昭和58年4月9日 学士会館本郷分館

出席者

交流センター訪日団:

陳冰同センター責任者、呉永禎副処長、尹延釗日本担当主管

中国大使館科学技術処:

夏允賦参事官、徐振寰通訳

本協会:

(会長) 有山兼孝、(会長代理) 橋口隆吉、(事務局長) 肥後孝

日本国際貿易促進会の招きで、標記センターの紹介と日中民間科学技術交流関係者との懇談のため3月29日より17日間の予定で上記訪日団が来日した。本協会との懇談概要の次のとおりであった。
○有山、陳両代表の挨拶

双方とも10年以上前の郭沫若先生健在の折、物理学訪中団の頃以来の面識があり、1980年華国鋒総理来日前の日中科学技術協力協定締結前の話題などに触れ、再会の喜びを述べ合われた。

陳団長は、新しい交流の方法など相談したいとして懇談に入る。

1. 中国科学技術交流センターの目的及び事務概要。別項参照。

2. (協会質問) 中国の科学技術事業の中における同センターの役割分担について

(1) 中国国家科学技術委員会との関係、同委は中国の科学技術に関する政策、計画及び組織等を所掌する政府機関であるが、センターは、同委員会の賛助・協力の下にある非営利の民間団体として、奉仕する組織である。

(2) 中国科学院との関係……同院は、基本研究に携わる傘下研究機関を有し、基本研究に係る全国の研究者の研究と研究費を管轄する。しかし、センターは、科学院の管轄以外の仕事を扱い、専門分野の幅も広い。

(3) 中国科学技術協会との関係、中科協は、学会の仕事及び学会に所属する科学、技術者に関する仕事を受け持っており、学会の連絡を図る。その対外的な仕事は同会国際部が受け持っている。

(4) センターの業務の特徴は、これらの科学技術の諸機構及び大学、研究機関に比べて、総合的であり、また専門分野に関しては幅が広く、政府の中央各部門に対しても、地方(省・市)の科学技術交流センターと緊密な連絡をもっているため、関係組織に向かっての中央センターとしての業務があると言える。

それは、非営利民間団体として、全国性、総合性に留意しつつ関係部門を相互につなぐ必要のある仕事とか、或は特に大型の仕事について、センターがその組織に当たり調整を行う機能を果たす。

3. 日中科学技術交流協会の業務概要紹介

(資料として、役員名簿、規約及び会報31号別紙会告、並びに昭和57年度中に刊行された会報、その他会員配布資料等を準備)。とくに①科学者

交流の助成を重点に ②会報の記事概要及び昭和57年度中の刊行物名並びにその他の事業について説明した。

4. 意見交換

(1) 本会が、これまで中国科学院、中科協、大学、研究機関等と行ってきた交流事業は従来同様にてできると考えてよいか。

〈答〉専門的なテーマのものは、直接その部門、地方と連絡して進めて結構。しかし、従来の組織機構で困難があるとか、うまく行かないようなものは、当センターに連絡して頂ければ良いと思う。

(2) (双方の組織の特徴を生かした) 国際会議を開くこと (提案として考えて頂いて結構)

我々のセンターが中国で国際会議を企画・組織する場合に貴会が日本側の協力組織となるという構想である。

テーマは、中国の経済建設に必要なもので、例えば生物の遺伝子工学とか、食品加工とか応用面の科学技術に興味をこめたものとなろう。もちろん、貴会に集う有名な科学者から共同してテーマの提案があれば提示して頂きたい。

この会議は、通常国際会議の慣例によって、参加費を参加者から出してもらうので、貴会もセンターも経済的な問題は解決できると考えている。センターが国際会議を主催する主な目的は、関係分野の科学技術の「発展動向を知る」ことにある。我々は、北京に「国際会議ビル」を建設しようとしている。しかしこれは明年の会議開催には間に合わない。建設完了前に会議を開く場合は、北京以外の地(上海など)になる。以上、双方の組織の協力として、可能ではないかと考えている。

(3) 他の提案として考えているのは、日本国内で、中国科学技術者の育成について、主として中規模以上の企業の現場の研究者・技術者に指導を受けつつ、科学技術上の高度の能力を養成することに協力して頂けないかという問題である。期間は1年でも2年でも良い。アメリカの例。或企業が中国の研究者を4人受入れ(年1人9千ドル負担)コンピューターシステムの仕事を先方の研究者1人に中

国人2人をつけ、仕事が完成して35万米ドルの収入を挙げた。中国人は数学は得意であり、このような形式は、関係4者(中国、中国人、受入国、受入機関)にプラスになると思う。

日本の大学、研究機関、中規模以上の研究者を抱えている企業などでの受入れの可能性について検討して頂けまいか。

(4) (協会側)意見

① 国際会議について、協会は、日中二国間の国際会議をやれるところまでまだ行ってないと思う。将来盛んにする必要があるとは思っている。提案されたものは、多数国から研究者が参加するものであれば、それは、従来

の例で可能な面もあるように考えられる。参考として、日本で沢山開かれる国際会議への中国の学者の参加をなるべく多くすることにも留意されることを望みたい。

何れにしても、具体的なものについて、今後連絡をとりつつ、検討して行くことは交流活発化のために必要である。本協会としても検討事項と考えたい。

② 大企業、中企業での、中国研究者・技術者の実務的な研究の企画は、企業秘密の問題に触れることであれば、困難と思う。

それらは、日中経済協会又は国貿促等を通じて、個々の企業と具体問題として当って行く方法もあるのではないかと思う。あるいは、今回の訪日で、コンピューターソフトの協定を結ばれたようであるが、その種のものについてはその協定関係企業との問題を、日本側の協定締結団体を通じて実際的に考えられる方法が良いとも考えられる。

本協会は、科学技術の問題に関して、従来も間接的に個々の具体的な研究者・研究機関等に助言連絡してできる限りお役に立ってきた。

この問題は、単純、簡単な問題ではない。具体的な問題について双方が緊密な連絡をとりつつ、現実的に対処して考えていくことが

適当であろう。

(陳)特許とか、企業秘密の問題にわたるものは困難と思う。貴協会は、大学とか、国公私研究機関で、こうした考え方を受け入れるところがあれば、それをセンターの方にリストの形にしてでも教えて貰えまいかと思った。

(橋口)レベルの高い研究をしている箇所については、単なる技能者受入れとは違うので、リスト化はむずかしいところがあることを含んで頂きたい。

(5) 最後に

初会談で、極めて限られた時間のため、十分にお互いの立場を尽し得なかった。しかし、総合的な問題とか、学問の分野の広さ、レベルの高い科学技術上の問題を扱うという、双方の組織の共通性は相互に理解できた。

(有山)本協会は、現在金のかかることはできないが、科学・技術の高いレベルの頭脳協力には最も適している。そこを活用できることであれば、いくらかでも協力を惜しまない。

今後とも緊密な連絡を図り、具体的な問題を積

み上げて行くことで、交流の強化を図って行きたい。

中国科学技術交流センターについて

同センターは1982年6月に設立され、国家科学技術委員会国際科学技術合作局の指導を受ける全国性をもつ団体である。

中国の科学技術界と各国の対応する民間科学技術団体・人士との交流、協力の促進を目的とし、(1)平等互惠、友好協力の基礎の上に交流、協力関係をつくる(2)外国からの科学技術人員の視察等の受け入れおよび中国の科学技術人員の外国視察への派遣(3)相互派遣による研究参加と技術開発(4)専門家の招聘による講義、技術説明会、研修会の開催(5)国際的な科学技術会議、報告会、シンポジウムの相互開催、持ちまわり開催(6)科学技術機関同士の情報交換の促進(7)研修活動のための外国の友好人士、団体の受け入れと物質的支援(8)国内各省・市の対外科学技術交流の連絡・調整などを行う。
アドレス：北京市復興門外三里河路54号

最近の中国科学技術

光明日報の科学技術関係記事

(*印は翻訳サービスします。会報No.28会告参照)

*全国農村科学技術工作会議で農村科学技術体制を改革する6つの着想(1.27, 720字)

*科学技術専門家と経済部門の密接な提携により、科学技術で経済と社会協調の発展を企画(2.2, 1450字)

*機械工業部党組織の決定：湖南大学に「左」傾思想の影響の肅清を命じ、知識人に対する政策を確実に貫徹し、残された問題の解決を求める(3.3, 620字)

*針灸療法がすでに50数ヶ国に伝わる(1.20, 500字)

*電子計算機による心臓診断で重要な進展(3.7, 190字)

*ゴム加工の新しい硫化方法を開発(1.25, 600字)

*広東で小発電所1万2千余を建設(2.12, 250字)

*泉州湾で宋代の海船を発見(3.17, 60字)

*多層古墓葬群を雲南省で発見(2.19, 240字)

*河北省で大量の哺乳動物の化石を発見(2.18, 70字)

*中国全国実験動物工作会議が雲南省で開かれる(1.27, 270字)

*中国の米の垂遠縁雑交による稲作りは世界の先端に行く(2.13, 570字)

電子工業の8導入プロジェクトが稼動

[北京2月26日発新華社=中国通信]北京で開催中の全国電子工業庁局長会議筋によると、中国の電子工業でこの数年間に導入された8つの大中型基本建設プロジェクトは82年にすべて予定通り

完成し、生産に入った。

これらのプロジェクトは中国電子工業に先進的技術設備を提供し、物質的技術的基礎を強化するもので、電子工業の発展に重要な役割をもっている。

8プロジェクトは、陝西省咸陽カラーブラウン管工場のカラーブラウン管生産ライン、上海第1テレビ工場、天津無線工場、北京テレビ工場のカラーテレビ生産ライン、上海第20無線工場のプリント基板生産ライン、長沙市韶光電気工場のクロム板生産ライン、南京市華東電子管工場の排気剤生産ライン、天津ブラウン管工場の白黒ブラウン管生産ラインである。これらのプロジェクトは大多数が1回の試運転で成功している。

スイスから導入された韶光電気工場のクロム板生産ラインは設備が先進的なもので、試験手段も完備しており、その完成は中国の超大規模集積回路(超LSI)の発展に重要な意味をもっている。日本から導入された咸陽カラーブラウン管プラントは年産96万本で、検査・稼動後に生産された12万本は国内のテレビ工場に取り付けた結果、品質は外国の同種製品の先進水準に達していた。

パンダは食肉動物

中国で7頭の解剖研究終了

〔北京3月16日発新華社＝中国通信〕陳銘記者…中国で世界の珍獣パンダ7頭に対する解剖・器官組織学的研究が終了し、パンダは矢竹を主食にしているが、食肉動物に属していることが立証された。

北京農業大学の林大誠教授(65)は16日記者に、パンダについて全面的な解剖研究を行ったのは、中国でも外国でもこれが初めてである、と述べた。

同教授によると、この作業は解剖学、組織学の教授、助教授、獣医ら22人の専門家が2年余りの共同の努力の未完成したもので、解剖した7頭のパンダはいずれも老衰または病気で死亡したものである。ほかに死んだ3頭の子供の解剖も行われた。

林教授は「5,600万年前の更新世にパンダはすでに存在し、しかも現在より広く分布していた。

大自然の変遷により、パンダは食肉動物から竹を食べる動物に変わり、またこのためにパンダは今日まで存在しえた」と述べた。

同教授はまた「解剖の結果、パンダの歯、骨格、消化器系統は形態上他の食肉動物に類似していた。パンダは竹のほか、ときにネズミのような小さな動物を食べている。四川省の自然保護区ではパンダが夜木こりの家でこっそりと豚肉を食べているのが目撃されている」と述べた。

北京ダックや豚の研究にも詳しい林教授は、「解剖の際、パンダの一部脳系統と心臓の位置が人間とやや似ていることを発見した。これはパンダが座ったり、直立したりできる原因と思われる」と述べた。

林教授は、パンダについての全面的な解剖と科学研究によって、人工繁殖、人工飼育および疾病の予防・治療に役立つ解剖構造と器官形態に関する大量の資料が得られた、と語った。

林業部門の調査によると、中国には現在1千頭余りのパンダがおり、全国に15のパンダ保護区が設けられている。そのうちパンダの主要生息地である西南部の四川省には、47万ヘクタールにおよぶ13の保護区がある。

林教授は、パンダは中国だけに生息する、世界でも珍しい貴重な動物であり、パンダの保護と研究の強化はわれわれの当然の責任である、と語った。

同教授によると、パンダの解剖は最近完成し、これに関する文書と写真は目下整理中であり、写真4百余枚、40万華字からなる「ジャイアント・パンダの解剖学と組織学」が中国科学出版社から近く出版される。

今回の解剖研究は1980年12月に始まり、北京大学、北京農業大学、北京第2医学院、北京動物園、北京自然博物館、陝西省動物研究所の6単位がこの作業に参加した。